

新県立博物館の整備について

実施概要

担当部局	実施期間	対象者数	回答者数	回答率
新博物館整備推進室	2010年02月04日から 2010年02月22日まで	1502	994	66%

県では、三重の自然や歴史・文化の資産を保全、継承、活用し、人づくりや地域づくりに貢献する「文化と知的探求の拠点」となる新博物館の整備を、2014（平成26）年、津市に開館することをめざして進めており、2010（平成22）年度には、施設建設に着手する予定です。

現在の三重県立博物館は、約28万点の資料を所蔵し、唯一の三重に関する総合博物館ですが、開館後、半世紀以上を経て、建物の老朽化により休館しています。博物館を閉鎖した状態が続くことで、三重のことを総合的に調査研究し、情報提供・発信する場がなくなっており、一日も早い新しい博物館の整備が必要になっています。

新博物館は、三重の未来を拓（ひら）く子どもたちにとっては、学校と異なる学びの場として、また、県民の皆さんにとっては、暮らしの舞台である地域の魅力を発見できる場として、展示を見るだけでなく、幅広い年代の人が、一緒に学び、交流し、活動できる新しいタイプの博物館となることをめざしています。

つきましては、こうした新博物館づくりにあたって、県民の皆さんのご意見を反映していきたいと考え、アンケートを実施します。

なお、1月26日の三重県議会において、知事が「なぜ今県立博物館か」について、説明を行いました。その発言内容を添付していますので、ご覧ください。

■ 添付ファイル

- [知事発言内容（知事口述）](#)

■ Q1 県内外の博物館への訪問

今まで、県内外の博物館に行かれたことはありますか。

合計	994	
ある（延べ5回以上）	268	27.0%
ある（延べ1～4回）	492	49.5%
ない	234	23.5%

■ Q2 三重県立博物館への訪問

今まで、三重県立博物館（所在地：津市）に行かれたことはありますか。

合計	994	
ある	332	33.4%
ない	662	66.6%

■ Q3 三重県立博物館の休館について

現在、三重県立博物館が老朽化と耐震性の問題から休館（平成19年10月から）となっていることを知っていましたか。

合計	994	
休館の理由も含め知っていた	188	18.9%
休館していることは知っていた	196	19.7%
知らなかった	610	61.4%

■ Q4 新県立博物館の整備について

2014（平成26）年開館をめざして、新しい県立博物館の整備が進められていることを知っていましたか。

合計	994	
内容も含め知っていた	74	7.4%
整備を進めていることは知っていた	319	32.1%
知らなかった	601	60.5%

各ページの記載記事、写真の無断転載を禁じます。
All Rights Reserved, Copyright(C)2006.Mie Prefecture

1月26日全員協議会知事口述

(はじめに)

はじめに、私から【資料1】及び「説明要旨」にそって、「なぜ今新県立博物館か」という理由につきまして、政策面、現県立博物館の状況、財政面の3つの点から、ご説明いたします。

(政策面から)

まず、1つ目の理由は、「新県立博物館」を整備することは、「美しく国おこし・三重」とあわせて、私が、一貫して進めてきた「文化力」による政策の重要な柱の一つであるということです。

(社会情勢の認識と新しい国のあり方)

一昨年来の世界同時不況のもとで、日本では、数年前まで思いも寄らなかった、「若者が定職につけない」、「格差の拡大」、「貧困」などの社会的課題が表面化しています。

こうした中、本来、自由な発想で、考え、行動し、失敗や成功体験の中で、学び、成長する年代であるはずの若者や子どもたちにとって、先が見えない、目標を持たない社会になっています。

このような時代の峠にさしかかった今、次に来る社会は、私たち

にとって、希望を持って、安心して暮らせる社会でなければなりません。そこで、私は、この国のあり方、目指すべき社会について、みんなで議論していくことが必要と申し上げてきたところです。

(コンクリートから人へ)

同時に、新政権が「コンクリートから人へ」という方向を打ち出していますが、博物館は、コンクリートではなく、まさに人への投資です。私が、「文化力」をベースに展開してきた政策は、まさしく方向性を同じくするものと考えています。

なかでも、大切に思えるのは、未来を拓く若者や子どもたちが、自分の生き方について考え、自己を確立し、ひいては、よき社会の担い手として成長するための育ちの支援や、大人の皆さんが、生き甲斐を見いだし、安心して、心豊かに人生を過ごせるような舞台づくりにもなると思います。新県立博物館は、このような施策にとって必要な施設と考えています。

(「文化力」政策の柱となる「新県立博物館」)

新県立博物館は、三重に関する実物の資料、記録や情報、専門的人材が集積する「文化と知的探究の拠点」です。また、公文書館機

能を一体化した博物館であり、私たち一人ひとりが、三重の自然と歴史・文化を、知り、深め、発信することができる博物館です。

「ともに考え、活動し、成長する博物館」として、「協創」と「連携」の2つの視点で、県民の皆さんとともに、調査研究、収集保存、活用発信の活動を行います。この博物館活動を通じて、県民の皆さん一人ひとりが、地域のよさに気づき、さらによくしようという思いが生まれ、また、県外の人にとっては、三重のよさをわかっただけのことをめざしています。

新県立博物館は、一人ひとりが、常に自分との関わりのなかで、「そういうことだったのか」という気づき・驚きとともに、もっと深く知りたい、そして、自分もやってみよう、という気持ちが自然にわいてくるような博物館です。

加えて、子どもから大人まで、幅広い年代の人が、地域の資料や情報について、一緒に学び、交流し、活動する中で、地域における自分の居場所を見つけ、未来に向けた創造のエネルギーなどが、わいてくる、そんな博物館づくりを県民の皆さんとともに進めていきたいと考えています。

(子どもたちの成長を支える博物館)

特に、子どもたちにとって新県立博物館は、学校とは異なる学びの場として、地域の生活文化や自然や歴史などに目を向け、実体験の中で学び、郷土に対する誇りと愛着や、人と人とのつながりを実感できる場、自分の生き方を発見し、知的好奇心と感性豊かな、地域のよき担い手として成長していくきっかけの場となります。

(「みえの文化力」の向上に貢献する博物館)

このような新しいタイプの博物館が機能することで、地域のことを知り、大切に思う人が生まれ、「人間力」、「地域力」、「創造力」といった「みえの文化力」は大きく向上します。

新県立博物館は、広く県民の皆さんとともに進める博物館活動を通じて、「美し国おこし・三重」と相乗効果を発揮しながら、今後の地域主権社会における三重の舞台づくりの担い手や主体的な活動を育み、支える環境を整え、「みえの文化力」を醸成します。

「新県立博物館の整備」は、20年後、30年後の三重をつくるための取組という意味で、未来への投資であり、今、すぐにでも、着手すべき施策であると考えています。

(総合文化ゾーンの形成)

そして、隣接する県総合文化センターとあわせた周辺地域は、今後、新県立博物館が加わり、より戦略的に展開することで、全体として、高い機能を有する、魅力的な総合文化ゾーンとなります。

県立の博物館、図書館、文化会館、生涯学習センター、フレンテみえ、美術館が、集積する理想的な環境のもとで、県民の皆さんは、自然から歴史・文化まで幅広く学び、交流し、創造活動を行うことができます。また、県外の方にとっても、三重のことがわかり、おもしろい文化体験ができる交流の場としての可能性が向上します。

特に、生涯学習センターなどが、各館の企画をうまく連携・広報できることや、図書館と博物館の公文書館機能が一体的に利用できることなど、各館の機能連携を進めることが、重要です。

何よりも、幅広い文化を対象とした、「三重の文化振興方針」において示した、生涯学習と文化振興を一体的に取り組んでいこうとした考え方を、この総合文化ゾーンにおいて、具体的に展開していくことができます。

(緊急の行政課題としての「現県立博物館」)

2つ目の理由は、開館後56年を経た現県立博物館の老朽化等への対応は、緊急の行政課題であることです。

(三重のことを伝え、継承するための拠点の喪失)

博物館が閉館した状態が続くことで、三重のことを総合的に調査・研究し、情報提供・発信する場がなくなります。そして、何にも増して、今の子どもたちが、博物館のもつ機能やサービスを受けられない、という状態だけは避けなければなりません。このため、一日も早く整備を進めることが必要です。

(収蔵場所の確保等)

また、「新博物館の整備を中止した場合の課題はどうか」という問いかけもありましたが、現県立博物館のもつ収蔵物の保存場所と管理、先行取得した土地などの問題について、早急に対応していく必要があります。このために、相応の経費がかかります。

とりわけ、早期に適切な収蔵環境を整備することは、県内の貴重な資産が県外へ流出したり、滅失したりすることを防ぐためにも、必要です。

(財政面から)

3つ目の理由を、財政面から申し上げます。

(22年度の財源見込み)

国の平成22年度地方財政対策をみると、地方税は21年度と比べて約10%の落ち込みはあるものの、臨時財政対策債を含めた地方交付税等が増額され、一般財源総額は21年度とほぼ同額が確保されていることから、本県においてもほぼ21年度並みの財源を確保できるのではないかと見込んでいます。

(22年度の予算編成方針)

現下の経済社会情勢をみると、22年度は「緊急雇用経済対策」を最優先に取り組む必要があると考えています。さらに、県単独の公共事業や社会保障関係等にもしっかりと対応していきたいと考えています。確かに厳しい財政状況ではありますが、事業の「選択と集中」を図り、創意工夫を行うことにより、真に必要な事業に適切に対応していきたいと考えています。

(基金の活用)

新県立博物館の整備にあたっては、起債の発行とともに一般財源の確保も必要となりますが、国の交付金を積み立てた基金等も活用できることから、この機会を捉えて整備を進めたいと考えています。

(起債)

起債の発行に伴う将来の財政負担については、平成 22 年度国家予算では、大型公共事業の見直しに伴い、公共事業関係費が 21 年度と比べて 18.3%の減額となっており、それに連動して地方が発行する建設地方債についても減少が想定されます。このことから、新県立博物館にかかる起債の発行については、将来の大きな財政負担の増加にはつながらないと考えています。

(多様な財源)

さらに、これまでも「ふるさと納税制度」を活用して寄付などのご支援をいただいているところですが、さらなる新県立博物館への財政支援をお願いするとともに、多様な財源調達の方法についても創意工夫していきたいと考えています。

(市場公募債の県民への販売)

たとえば、今秋に発行を予定している市場公募債については、(いわゆる「ミニ公募債」とは異なり) 引き受けの金融機関が大口の機関投資家に販売することになりますが、その発行の一部を県民などの個人向け購入に振り分けて、新県立博物館建設の財源として少しでも多くの県民の方にご購入いただくことができないか、金融機関に打診しているところです。

財政面においては、以上のような財源活用の工夫により、他の必要な事業の進捗に影響を与えることなく、また、将来の県民の負担増につながらないように、新県立博物館の整備が進められるものと考えています。

(開館時期)

なお、開館時期については、平成 26 年を好機ととらえて、進めてきました。平成 25～26 年は、ご遷宮の効果などにより、三重県に全国的な注目が集まり、来県者も多くなります。このことは、県外へ

の広報効果を期待できるとともに、来館者数の確保もしやすくなり、大変効果的です。こういった好機はしっかりと活用すべきと考えています。

以上、3つの視点からご説明してまいりましたとおり、総合的にみて、まさに今、整備するための環境は、整っていると考えています。

経済、財政状況は引き続き厳しい中ではありますが、子どもたちも待ってはくれません。20年後を担う人づくりは、今始まっているわけですから、今を生きるだけでなく、未来への投資ということも見据えてしっかりと進めていきたいと思えます。

(最後に)

最後に、私が今県政に取り組む上で、常に問いかけていることがあります。それは、別紙としてお手元に配付させていただきましたが、東京大学の玄田有史さんらが研究しておられる「希望学」における「希望」の定義に表れています。

「希望」とは、「A wish for something to come true by action」、

つまり「何か(something)目的をもって、行動(action)することにより、実現(come true)していこうとする願望(wish)」です。

一方で、村上龍さんの著作「希望の国のエクソダス」においても「この国には何でもある。だが、希望だけがない。」という象徴的な一文が書かれているように、特に、本来夢一杯のはずの若者にとって、夢がいただけないような状況になっているのではないか、という思いがあります。

こんな状況のもとで、行政として、何ができるか、
私たちの社会や地域で、若者や住民の多くが、

- ・ something をもてる環境にあるのだろうか。
- ・ come true することを阻害する要因はないのか。
- ・ action できる舞台環境にあるのだろうか。

これらの問いかけとともに、子どもたちの知りたい、学びたいという期待に応え、また、県民の皆さんが、地域の価値に気づき、よりよくしていこうとする力となり、持続的な地域づくりを進めるための場となる新県立博物館を、ぜひ今、整備することが必要であることを改めて強く申し上げて、私の説明とさせていただきます。

次に、担当部長から県民の皆さんへの説明と意見集約の取組などについてご説明します。